

学習者の誤りの意義

甲斐 順

1. はじめに

私の大学院時代の恩師で、今は亡き山岡俊比古先生から第二言語習得研究を教わったのは、1999年、もう20年以上も前のことになります。先生が「第二言語習得論」の講義で、Corderが1967年に発表した論文“The significance of learner’s errors”は‘seminal paper’だと言われたことを今でも思い出します。その論文を先生からお借りしコピーさせていただきました。先生の書き込みが随所に見られる論文のコピーは私の宝物でもあります。その後の第二言語習得研究の発展(例えば「中間言語」)につながるこの論文は、ただただ恐れ入るばかりです。この論文の要旨はフランス語とドイツ語で書かれています。当時はそれが普通だったようですが、初めて両言語の要旨が載った論文を手にしたとき、どれほど驚いたことでしょう。

Corderは、論文の中でmistakes(言語運用上の誤り、ちょっとした言い間違い、書き損じ)とerrors(体系的な誤り)を区別した上で、学習者の誤り(errors)は①教員、②研究者、③学習者自身にとって意義があると述べています。教員にとっては、学習者が目標に向けてどのくらい進捗し、学ぶべきこととして何が残されているかを教えてくれると言います。研究者にとっては言語がどのように学ばれたか、習得されたかを示す証拠、言語を発見する過程で学習者が使用しているストラテジーや手順を提供すると述べています。学習者自身にとっては、誤りを学習者が学ぶのに使う手段としてみなすことができるので、必要不可欠なものであると述べています。興味深いのは、Corderが学習者について触れるくだりで、Thirdly (and in a sense this is their most important aspect)「第3に、(ある意味において、これが最も重要な側面である)」とわざわざ括弧書きにしているところです。学習者(私も含めて)が誤りを犯してくれるおかげで、教員、研究者は誤りを

防ぐためにどんな対策をとればよいのか、どんな指導やフィードバックを行えばよいのかを考え、行動する契機となります。教員や研究者から誤りを正す手立てを授けることによって、学習者は恩恵を受けることができます。したがって、学習者の犯す誤りは、教員、研究者、学習者の3者にとって意義があると言えるでしょう。

なお、近年ではerrorsに代わってnon-target-likeという用語が用いられる(奥野, 2021)ようですが、本稿では第二言語習得研究の始祖とされるCorderに敬意を表して、誤り(errors)という用語を用いて筆を進めます。

2. 学習者の発音の誤り

まず、生徒がよく誤る発音をいくつか取り上げます。comfortableは第一音節に強勢がありますが、生徒はよく第二音節、つまりfortの部分に強勢を置いて発音します。日本語になっている外来語の英単語、例えば「ペンギン」や「サンタクロース」も、penguinならば、/w/の音を落として、Santa Clausならば語末の/z/を/s/と発音しがちです。

個人指名の音読の時に、laneやpane, primeなどの語末がeで終わる単語をうまく発音できずに、音読を中断、あるいは別の発音をする生徒がいます。こういう時は、その生徒が一通り音読を終えたときに、生徒全員にも覚えてほしいので、敢えて読めなかった単語を板書します。そして、生徒が知っていると思われる単語、例えば、plane, came, name, same, time, nineなどを板書します。そして誤った発音をしていた生徒に新たに板書した一つひとつの単語を発音させるか、クラス全体に向けてペアでどう発音するか確認するよう指示します。その後、誤って発音していた生徒を再度指名し、laneやpane, chimeなどの語を発音させてみます。すると見事に正しく発音できるようになります。まとめ

として、クラス全体で誤って発音していた語だけでなく、板書したすべての単語の発音練習を行い、正しい発音の定着を図ります。

個人指名の音読をさせると the environment や the earth, the organization などのように the+母音で始まる単語も the/ðə/ と発音しがちです。本来ならば、the の直後の音が母音ですから、the は /ði/ と発音する必要があります。1つの段落に the environment が複数回使われていて、何度も the/ðə/ と発音していれば、(mistake ではなく) error であると言えるでしょう。こういった場合も the apple, the orange, the egg, the ink などと板書し、前述したように、個人やペアから生徒が持っている知識を引き出し、/ði/ と正しい発音ができるように指導します。

音読の際、個人指名した生徒が、正しく音読ができるに越したことはありません。しかし、1クラス約 40 人いる中で、全員の発音を 1 度に確認するのは至難の業です。コーラスリーディングやバズリーディングで誤った発音に気づく場合もありますが、それでも誤った発音が定着している生徒が埋没している可能性はゼロではありません。個人指名の音読で、誤った発音をしてくれる生徒がいることで、クラス全体で誤りを認識し、正しい発音を共有することができます。この時こそがまさに学習者の誤りの意義を実感できる瞬間でもあります。

なお、1つの科目を複数クラス担当している場合、あるクラスでは誤って発音していた単語も、別のクラスでは正しく発音して読めてしまうことがあります。取り上げて確認するか素通りするかは、誤りの程度や授業時間との関係で判断しています。

3. 学習者の綴りの誤り

発音に関係して、綴りの誤りも学習者にはよく見られます。environment や government では中ほどにある n を落として、enviroment, government と生徒は書き表します。/n/ を発音しない場合もあるので、発音に引きずられて誤った綴りを書き記すようです。こんな時は、後者ならば govern を示して、ment が付くことを示すと解決しますが、前者の場合は、正しい綴りを示し、口酸っぱく n が必要だと指導するようにしています。

日本人が難しい /l/ と /r/ の発音にまつわる綴り

の誤りも見られます。前任校で高校3年生の生徒が、志願する難関国立大学の過去問で自由英作文が出題されるので添削してほしいと頼みにきました。

生徒の英作文を読み始めていくと、grobal や globalized という綴りが複数箇所記されているのに気づきました。global を grobal と書く誤りはこれまでも数多くの学習者の英作文で見ましたが、この生徒は授業やテストで課した作文の中で常に grobal と書いていたような記憶が蘇ってきました。添削を終えて、英作文を返却する際に、「grobal は global だよ。よく最初の l を r と間違えて書く人が結構いるんだけど、○○さんはいつもこう書いていなかったっけ？」とたずねると、「そういえば、何となくそんな気がします。気をつけます」と元気に答えてくれました。

生徒たちが書いた英作文については、定期テストを含めて、すべての誤りに対して可能な限り包括的な訂正を施して返却するようにしておりました。grobal については r の箇所の下線を引き、l に訂正したり、global と正しい綴りを書き、最初の l に下線を引いたりしてフィードバックしておりましたが、この生徒は、これまでの私の包括的な訂正フィードバックに全く気づいていなかったようです。いやそれどころか、これまでに相当量の英文に触れる中で、この生徒は何度も正しい綴りである global を目にしてきたはずですが、それでも誤っていることに驚きつつ、受験前で良かったという安堵の気持ちも湧き上がりました。

「とにかく書いてみるしかないよ。まだ時間があるから頑張って。global を書く時は、綴りに気をつけてね」と言って、この生徒を送り出していきました。この生徒は第一志望校の難関国立大学に見事合格しました。受験後には、global を書くような英作文は出題されなかったと報告がありました。フィードバックする際には、何らかの形で、学習者が正しく直しているか確認する必要があるという反省の機会を与えてくれたこの生徒に感謝です。

たかが綴りとは言え、やはり綴りを見て、私たちはその人の英語力を判断するはずですが、1か所であれば見落とすかもしれませんが、複数あれば、これは書き間違い、Corder による mistakes ではなく、明らかに errors です。「成績」を「成積」と複数回書いている人の日本文を読めば、その人の日本語力

を押し量れるように、綴りで私たちは、英語力を判断するはずです。正確な綴りを習得させたいものです。

4. 学習者の語彙・語法・文法の誤り

学習者の語彙・語法・文法の誤りは枚挙に暇がありません。前節では綴りの誤りを取り上げましたが、本節では、まず学習者の語彙の誤りを取り上げます。現任校のコミュニケーション英語Ⅱの2学期中間試験に教科書の本文を下敷きに架空の留学生と高校生の対話文を作成し、対話文中の複数の個所を英語で表現させる問題を出題しました(前半部は省略)。

Shawn: (E) when you finish it?

Yosuke: Sure. It will probably take a couple of weeks, though.

Shawn: OK. Take your time.

Yosuke: Thanks.

(E)は borrow を必ず用い、5～6語で書くこと。

正答例は、Can I borrow your book/Could I borrow the book/May I borrow this book などでした。生徒たちの多くが、Can you borrow me the book/Can you borrow me this book/Could you borrow me this book/Would you borrow me the book/Do you mind me borrow it/Please borrow me the book などと書いていました。明らかに borrow と lend を混同していることがわかります。

語法の誤りでよく見られるのは、“I went to shopping with my friend.”と“He went to hunting.”や“I went to fishing.”の go to ～ing です。go to ～「～に行く」が定着して誤るようで、go ～ing と話したり書いたりできない実態が浮かびます。口頭でやり取りしている場合は、You went shopping with your friend. と recast して、訂正フィードバックを行っています。

和文英訳の授業では、「私の宿題を手伝う」を help my homework のように、「彼は彼女と結婚して10年になる」を He has been married with her for ten years. のように書く誤りもよく見られ

ます。明示的に正しい形(help me with my homework や He has been married to her.)を提示し、生徒の誤りが減るように努めます。

文法の誤りでよく見られるのは冠詞の誤りです。前任校や現任校では高校3年生になっても平気で母音で始まる発音の綴り字を a で初めて、例えば a astronaut と書く生徒がいます。英作文の授業では、机間指導しているときに、a astronaut の部分を指さしたり、発音したりして個別に対応し、学習者の気づきを促すようにしています。

規則動詞の過去形に -ed をつける規則を不規則動詞の過去形にまで適用する overgeneralization(過剰一般化)は生徒が書いた英文を見ているとよく表れます。例えば、feeled happy/eated breakfast/spended two hours/maked money などです。前任校のような県内トップクラスの学校でもしばしば見られ、私が中学生の頃に呪文のように、feel-felt-felt/eat-ate-eaten/spend-spent-spent/make-made-made と唱えさせられた練習が不足しているのではないかという印象を持ちます。

現任校のコミュニケーション英語Ⅱの2学期中間試験に修学旅行初日に家を出るまでの様子を描いた物語を作成し出題してみました(前後の英文は省略)。

When I entered the dining room, I found that my parents were already there. I said, “Good morning, Mom and Dad.” My mother replied, “Good morning, Yoko,” and asked, “Did you have a good sleep last night?” I hesitated to answer, but I didn’t want to make my mother worried. I told her a lie. I answered, “Yes, (②).” My parents looked relieved to hear that. Then my mother said, “Breakfast is ready. Enjoy the meal.”

「本文中の(②)内には well を必ず用い、3～6語の英語で書くこと」という条件をつけて書かせてみました。116人中、I slept well. と7人が、I slept very well. と1人が書いていました(正答例は I slept (very) well./I could sleep well.). I slept well. と書けたのは19人、I slept very well. と書けたのは2人、I could sleep well. が3人でした。約7%が slept を使っていましたが、無回

答の生徒が21人、その他 I can sleep well. など数多くの誤答が見られました。sleeped を実際にはもっと多くの生徒が使っている可能性もあります。答案返却の際に正しい形を提示して注意を促しました。

英語で書く際の because 節の断片文使用もよく見られる誤りです。断片文とは、“I couldn't attend the meeting yesterday. Because I was sick.” の because 節を主節と切り離して独立させた単体の英文を指します。甲斐(2019)は、高校1年生80人を対象に、学習者のすべての誤りに対して訂正を行う「包括的な訂正フィードバック」を通じて、ディベートと定期試験で書いた英作文及びアンケートの回答を分析しています。最終調査対象者64人のうち、because 節を断片文として使用しているのは、ディベートの作文で27人(42.2%)、定期試験の作文で41人(64.1%)でした。断片文使用については、母語、中学校英語教科書、中学校教員の指導の順に影響が見られることや1度だけの包括的な訂正フィードバックは効果が見られないことが示されています。包括的な訂正フィードバックについては、第3節でも触れましたが、学習者がそれに気付かない可能性がありますので、because 節の誤用に焦点を絞り、明示的に繰り返し指導するのが経験からよいように思われます。

5. 学習者の談話の誤り

長期休暇明けなどに、“How was your vacation?”と質問すると、“I didn't go outside.”や“I stayed home.”などと生徒が答えます。この後間髪を入れずに、“So, you didn't go anywhere?”や“You didn't go to a shrine or temple, did you?”などとたずねると生徒は、“Yes.”と答えます。そういうときは、すかさず“You didn't go anywhere, right?”と突っ込むのですが、それでも生徒は“Yes.”と答えてしまいます。日本語と英語の発想の違いは、難しいようです。“You have to say, 'No.'”と訂正フィードバックしますが、日本語と英語の発想の違いに関わる部分は、丁寧に指導する必要があるようです。

6. 学習者の身振りの誤り

上記の談話の誤りに関連して、よく見られるのが、身振り、いわゆるジェスチャーの誤りです。否定疑問文(“Didn't you go anywhere during the winter

vacation?”)や付加疑問文(“You didn't study at all, did you?”)で生徒に問いかけると、生徒は日本語の「はい、しませんでした」のつもりで、“Yes.”と答えながら頭(首)を縦方向、つまり上下に動かします。本来ならば、やっていない場合は、頭(首)を横方向、つまり左右に振らなければいけないのに、ついつい日本語の発想で誤るようです。こんな時も、“Yes.”の時は、私がわざと頭を上下に大きく動かし、“No.”の時は頭を左右に大きく動かして、英語で答える時の身振りの見本を示します。日本語で簡単に説明を加えることもありますが、日英の発想の違いに慣れるのには時間がかかるようで、なかなか直らない生徒もいます。

7. おわりに

To err is human. という諺があるように、誤りを犯すのが人間です。学習者が誤りを犯すことで、学習者や教員の成長につながるのであれば、なおさらよいのかもしれませんが、私の今は亡き大学時代の恩師、伊藤健三先生は、「教えつつ学び、学びつつ教える」という言葉を授けてくださいました。学習者の誤りから学び、どう教えたらよいか。長年教壇に立っていても、その場ではうまく対応できないこともあります。「英語の先生は3度の飯(食事)よりも英語が好きでないといけない」とも伊藤先生は言われていました。私は教員であり、研究者であると同時に、第二言語だけでなく母語である日本語を含む言語の学習者です。今後も学習者(私自身を含む)の誤りに目を向け、大いにその意義を感じていきたいと願っています。

参考文献

- Corder, S. P. (1967). The significance of learner's errors. *International Review of Applied Linguistics*, 5, 161-170.
- 甲斐順(2019). 日本の高校生英語学習者による because 節の断片文としての使用に関する調査結果：包括的な訂正フィードバックを通じて。 *JAAL in JACET proceedings*, 1, 76-83.

(神奈川県立松陽高等学校 総括教諭)